

富江地区

福江島の最南端、低い半島に位置する富江地区。約 100 万年前、この地域の火山活動は粘性の低い玄武岩質の溶岩流を生成し始めた。そのうちのひとつ、51 万年前から 18 万年前にかけて発生したと推定される溶岩流によって、富江の大部分を占める溶岩台地が形成された。

見どころ

井穴

溶岩洞窟は、噴火した溶岩が流路の岩石を溶かしながら下山することで形成される。溶岩流の中心部は高温で流動的なままであるが、外側の表面は空気や水に触れると冷えて固まる。中心部の液状の核が流れると、石の空洞のトンネル（固まった殻）が残される。富江にはこのようなトンネルが数多く見られるが、最大のものは長さ 1,400 メートルの井穴である。溶岩洞窟の下部は水で満たされており、五島で初めて発見されたハゼの一種、ドウクツミズハゼなどの珍しい洞窟生物が生息している。また、洞窟のような上部には数種のコウモリが生息しており、建築用の石材を必要とする地元住民によって採石場として利用されることもあった。

石蔵

この 9 メートル×25 メートルの玄武岩ブロック造りの石蔵は、17 世紀か 18 世紀に地元の領主が建てた大きな建物の壁だけが残っている。火山性の玄武岩は富江全域で大量に産出し、非常に硬く断熱性に優れているため、古くから重要な建築材料であった。地元の農民は荒削りや自然石を使うことが多かったが、領主はこの建物の建設に多大な手間と費用をかけた。石は苦労してカットされ、モルタルなしで組み合わせられるブロックに成形された。天候や害虫に左右されない蔵は、収穫した米を保管するために特に重要であった。